

# 未来への記憶 —流民たちのコミューン

ジャーナリスト、元毎日新聞論説委員  
池田知隆

## 透明な街で

故郷の駅に降り立つたびに、目の前の風景が白々しく、透明化しているように見える。私が20歳まで過ごした熊本県荒尾市のJR荒尾駅前。少し歩くと、街路の並木は根元から切られていた。落ち葉などの清掃費が市の財政負担になるためらしい。見通しはよくなつたが、殺伐とした荒地に変わろうとしている。かろうじて実家の前のメタセコイアの並木は残っていたが、それが石炭の原本だと知る人は少ない。

戦後の一時期、隣接する福岡県大牟田市を中心に「炭都」といわれ、三池炭鉱の景気でにぎわった。いまどき「たんと」と口に出しても、軽自動車の名前を思い起こすくらいで、「炭都」という言葉はとっくに死語と化した。有明海、遠く雲仙岳を臨み、「海の見える競馬場」としてにぎわった荒尾競馬場は閉鎖され、母校の小学校も中学校も統合され、校名は消えた。

ただ炭鉱跡は日本の産業近代化遺産としてユネスコ世界遺産に認定され、観光名所となっている。荒尾駅前にかつて、大きなソテツの樹が植えられ、まるで地底のエネルギーが地上へと噴き出しているかのように見えたものだ。それに代わっていまは、「豊坑櫓(やぐら)」を模した鉄骨モニュメントが置かれている。一瞬、南太平洋の孤島、イースター島のモアイ像が浮かび、みんな「豊坑櫓」を残し、どこに消えてしまったのだろうか、という思いに浸った。炭鉱が灯した文化的な遺産とはいいったいなんなのだろうか。



## 共生共死の世界

「地底の仕事は辛いように見えるけど、けっこう楽しかったんですよ」

三井三池炭鉱に現存する日本最大級の炭鉱遺跡「万田坑」。にこやかに案内してくれた元鉱員のボランティアガイドの言葉に一瞬、はっとさせられた。炭鉱労働者には特有の仲間意識がある。過酷な労働とはいえ働く喜びが忘れられないこととしてそのガイドの記憶に刻まれていた。

敷地内には、明治・大正時代に使用された巨大な鋼鉄製の豊坑櫓やレンガ造りの巻揚機室、迫力ある施設や浴室など残っている。当時、そこで働き、生活していた人たちの様子が肌で感じられ、坑口をのぞきこむと、炭鉱マンの息遣いが聞こえてくるかのようだ。



九州から炭鉱が消えたとき、私は新聞に次のようなコラムを書いた。21世紀に入った年で、もう17年前になる。

いよいよ九州から、ヤマ(炭鉱)が消える。西海の小島で細々と生き続けた池島炭鉱(長崎県外海町)が29日閉山する。炭鉱が身近な存在だった多くの人々は「ふるさと」が消えるような愛惜の思いにかられるだろう。

ヤマは、「共生共死」の社会だ。地下の大工場で働く炭鉱マンは、掘削、換気、輸送などに分かれ、協力し合う。仲間に助けられ、親、兄弟、親友を事故で失いながら生きてきた人たちだ。地上の生活にも助け合いは欠かせない。

池島の操業開始は1959年、三池炭鉱(福岡県大牟田市)の大争議が始まった年だ。もともと電気も水道も無かった島に優良鉱が出来、今は約2300人が暮らす。電気は炭鉱の変電設備で、水は海水淡化装置で各戸に送られ、病院は社有。炭鉱マンは賃金カットに同意して存続を訴えてきた。

「炭鉱マンの顔がいい。日本人の男にやっと会えた

思い」。来春に閉山予定の国内最後の炭鉱、太平洋炭鉱（北海道釧路市）などを記録した映画「闇を掘る」を各地で上映している藤本幸久監督は振り返る。謙虚で、おおらかで、人と深くかかわって生きてきた姿がその顔ににじんでいた。

映画には、炭鉱で暮らした3家族が閉山後も年に1度、炭鉱長屋のあった場所に集う光景がある。血縁、地縁が薄れ、個々人がばらばらになる時代の中で、「共に生きた」という実感を再確認しているようだった。「炭鉱で生きた人には“私たち”が今も息づいている」と藤本監督は言う。

石炭から石油へのエネルギー革命のとき、離職者への手厚い援護がなされた。構造改革がいわれ、雇用状況が悪化する現在、援護の声は届きにくい。ヤマの灯は消えても、互いに支え合う「私たち」という共生感覚は受け継ぎたい。

（2001年11月26日、毎日新聞「余録」より）

「共生共死」という炭鉱労働の世界。そこには「私たち」という共生感覚で結ばれた文化が濃厚に息づいていたのではないか。炭鉱の暮らしを間近で見つめながら育った私の脳裏にそう刷り込まれている。

子どものころ、夕方、路地で缶蹴り遊びをしていると、坑口から帰宅の途についた炭鉱マンたちが「今日も一日、懸命にはたらいてきたぞ」とでもいわんばかりの顔をしていた。すすけた顔で額に汗し、懸命に働いていた大人たちに、私たちの生活は支えられているという畏敬の思いが自然と湧き上がっていた。

命がけの炭鉱の仕事を通して自分の暮らしを守ろうとだれもが精一杯だった。今の労組と比べることのできないほど、「働く仲間」の意識が強かった。働いて生き、家族をさせていく、ただそれだけのことかもしれないが、その幸せ感がとても懐かしい。

## 総力戦に殉じた「三井王国」

三池炭鉱のある大牟田・荒尾地域は、福岡、熊本県の県境にある。かつては有明海に面した小さな港と丘陵地帯に広がる農漁村で、両県の県庁所在地から遠い辺境の地だ。県境を流れる諫訪川の水争いから生じたという荒尾市の飛び地が大牟田市域にある。県境を超えた共通の地域文化圏が形成されている。私なりにその歴史の歩みを早足で辿ってみよう。

石炭が燃える石として発見されたのは、「応仁の

乱」のころ。江戸期になって柳川藩、三池藩のもとで少しづつ発掘された。明治以降、三井財閥に鉱山が払い下げられると、この地域は企業城下町となり、大牟田市域の約三分の一近くが三井の所有地ともいわれたほどだ。近代化に向けて最先端の技術が次々と導入され、富国強兵のためにエネルギー供給の底支えの役割を担っていく。

石炭コンビナートが建設されると、各地から一気に人が集まり、大牟田・荒尾地域で1万人余だった人口は最盛期には30万人を超えていた。三池では受刑者の強制労働に始まり、日中戦争、太平洋戦争に向けての国家総力戦体制が敷かれる中で、朝鮮人の徴用、中国人の強制連行、戦争捕虜、そして与論島などの南の島人たちなどさまざまな労働者が流入し、独自の「企業王国」がつくりあげられた。

三井関連の企業による連行朝鮮人の数は、鉱業関連で6万人を超え、連行者の総数は10万人近かったといわれる。三池には1940年ころから連行された朝鮮人の数は9000人以上とみられる。三井関連の事業所に連行された中国人は1万人近くになり、三池には2480人ほどが来ている。

1944年12月末の三池の労働者の現在員数をみると、日本人が約1万7000人、朝鮮人が3459人、中国人917人、俘虜1117人となっている。1945年4月の全労働者数は約2万5000人で、そのうち日本人の長期労働者が49パーセント、朝鮮人・中国人・俘虜が34パーセントを占めている。在日朝鮮人が勤労報国隊などの形で短期の強制動員されているケースもあり、連行者数はさらに増える。<sup>1)</sup>

数々の証言によると、労働の実態は極めて過酷だった。休むと食料を減らされ、激しく殴打されるなど暴力的な管理が行われ、長時間の過重労働や度重なる事故で逃亡者が相次いだ。連行後に徵兵され、アジア各地に再び連行され、そこで死を強いられた人々もいた。

敗戦当時、三井三池炭鉱にいた軍人および民間人の戦争捕虜は1737人。三井の9つの捕虜収容所に、米国人730人、オーストラリア人420人、オランダ人332人、英国人250人、それに他の国籍の55人が収容され、鉱山労働者や港湾労働者として使われていた。<sup>2)</sup>

この三池は、虐げられた人々の国際的な「るっぽ」でもあった。

## 社会主義的「ユートピア」へ

日本の敗戦とともに、三池炭鉱をめぐる労働者の姿は激変する。

炭鉱の現場では動搖と混乱が続き、とりわけ差別的かつ不当な処遇を強いられた中国人労働者たちによる一種の報復行動が集中的に発生したという。

「中国人を使役していた万田坑・四ッ山坑・宮浦坑では戦時中、打つ蹴る撲るというふうに彼等を酷使していたので、終戦直後には坑内先山クラス以上の者は復讐を恐れて、殆ど姿をくらませた」<sup>3)</sup>

労務担当などの責任的地位についていた人々は、毎日、中国人連行者に呼び出されて吊し上げられた。剣付き鉄砲をつきつけられ、物資の調達にも追い回される状態だった。そんな無秩序な状態がしばらく続いたあと、中国人や朝鮮人、戦争俘虜たちが炭鉱を去り、日本人の労働者の中にも就労を見限る人もいた。1945年6月、24466人いた労働者は、敗戦後の11月には10283人まで激減している。<sup>4)</sup>

しかし、いったんは1万人そこそこにまで激減した炭鉱労働者も翌年12月になると、28130人に激増している。いわゆる「傾斜生産方式」という、石炭・鉄鋼・肥料産業に資金や資材、労働力を集中させる国の政策が採られたため、海外からの復員軍人を含め全国各地から労働者が殺到した。経営者側も、当面の労働者不足からほとんど審査らしい審査もせず、どんどん採用した。たくさんの新住民が流れ込み、新たな労働者による「コミューン」が形成されていく。

敗戦後のGHQによる民主化政策によって45年12月22日に労働組合法が公布される。もともと三池炭鉱労組は労使協調派の力が強く、労働争議などには消極的で、労働運動にたいする経験は皆無に等しかった。だが、それまでの労働条件の厳しさの反動からか、三池の労働組合は次々と職場改善を求めてストライキ戦術を駆使していった。強制的に連行されてきた朝鮮人や中国人、戦争捕虜がいなくなったあとに、全国から集まってきた労働者たちによる社会主義的「ユートピア」への夢が地域を包み込んでいった。

## 炭鉱住宅という「コミューン」(生活共同体)

人々が集まると、そこに新しい文化や生活慣習が生まれる。福岡と熊本の県境には炭鉱景気に沸く「闇市」が広がり、商店街ができた。私の両親も炭鉱

景気に吸い寄せられてこの地に住み着いた。

個人的な話になるが、敗戦前、父は満州(中国東北部)から九州に「転戦」し、本土決戦に備えて飛行場建設などにあたっていた。宮崎の火薬工場に動員されていた母を紹介され、長崎原爆投下(8月9日)の前夜、熊本の天水村で結婚式をあげた(参列した親族は翌朝、有明海のかなたに立ち上る原爆雲を見たという)。戦争が終わると、二人は荒尾市に移り住み、父は天水村の農家からミカンを買い出し、自転車に積んで県境の闇市まで運び、それを売って生活をしのいだ。その後、荒尾駅前で自転車店を営み、私はそこで生まれた。直接、炭鉱とかかわりがあったわけではないが、私は炭鉱景気にわく街の盛衰を見つめながら育った。

小学校区内に、県境にまたがる炭鉱住宅(「炭住」)、四山社宅があった。荒尾市側は「熊〇〇棟」、大牟田市側は「福〇〇棟」と呼ばれ、木造2階建ての6戸で一棟の長屋形式が多かった。電気、水道は無料。保育所、銭湯、購買所、グラウンドがあり、居住者の結びつきが強く、独立完結型の社会ができていた。時には広場で映画が上映され、社宅外に住む私にとって、そのなごやかな暮らしぶりがうらやましく思えたほどだ。小学校の運動会のメインイベント、地域対抗リレーでは、四山社宅A、もしくは同Bチームが常に1位を争い、炭鉱マンたちの元気な走る姿がたくましく見えた。

炭住は、いわば一種のコミューン(共同体)だった。世話になったり、面倒をかけたりするといった日常生活には、人々の思いやりにあふれ、命がけの仕事ゆえに暮らしの裏側にはいつも近隣のよき支えあいがあった。

だが、私が小学校5、6年のころになると、三池争議が激しくなり、組合が分裂。炭住の出入り口に労組員による見張所ができ、近寄り難い雰囲気ができた。「みんな仲間だ、炭掘る仲間～」と街中、高らかに流して回る組合の情宣車。労働者の連帯を叫ぶ歌声をよく聞き、「総資本対総労働の対決」が呼ばれた「三池争議」を目についた。

「去るも地獄、残るも地獄」といわれ、組合の分裂、離散をめぐって人々は底知れない悲哀に見舞われた。中学に入ると、「全国学力テスト」反対を叫ぶ教師たちの指示で、教室を離れ、テストを拒否した。中学3年だった1963年11月、戦後最悪の炭塵爆発が起き、多くの級友たちが父や兄を失った。

その年に地元に開校した国立有明工業専門学校に私は翌春、進学した。東京五輪が開かれ、新幹線が走り出した年である。経済成長を支える人材の育成をうたった学校の校舎は大牟田市、学生寮は荒尾市と分かれて建てられ、同期生たちの出身地は北九州から鹿児島まで広がっていた。この三池地域は人が流入しやすいところなんだ、と不思議な気がしたものだ。

辺境は時代の先端でもある。新しい時代の波、息吹をもろに浴びる。それだけに衰退するのも速い。産業構造の変化とともに各地から集まつた人々はいつの間にか散り、炭住は完全に消え失せた。「物の見事に」としか言いようがないほど、その跡形もない。四山住宅のあたり一面には、太陽光パネルが広がっている。

## 振り返れば、未来。

目をつぶれば、炭鉱景気にわき、雑多な人々の生活のエネルギーに沸き立っていた光景が思い浮かんでくる。荒尾駅前の両翼にぎっしりと軒を連ねた大衆食堂。県境の闇市マーケットや商店街の周辺には7、8館もの映画館があった。大牟田の銀座通りにあるデパート「松屋」に母とでかけ、お子様ランチを食べるのがなにより楽しみだった。

もはや「戦後ではない」と経済白書にかかれている1956年には「荒尾高校」事件が起きている。小学生のころ、「荒尾高校に警官隊が突入したそうな」と聞いた記憶がほんやりとある。少年犯罪データベースを開いてみると、9月の運動会の後、生徒たちがファイヤーストームを始めたときのことだ。教師がやめさせようとすると、怒った生徒200人は校舎のガラスを割り、投石し、ピケを張って大暴れした。翌日には約60人の武装警官が駆けつけ、深夜ようやく治まったという。だが、学校側は突然、全校生徒870人のうち退学者4人を含む437人の処分を発表したことでさらに大騒動に発展。結局、校長の退職、全教師への行政処分で収拾されたそうだが、この地にはとほうもないアーネークイーなエネルギーが充満していた。

「炭鉱は文化を生み出したが、原発は文化を生み出さなかった」と語るのは、映画監督の熊谷博子さんだ。ドキュメンタリー映画『三池 終わらない炭鉱（やま）の物語』（2005年）を制作し、著書『むかし原発いま炭鉱～炭都[三池]から日本を掘る』（中央公論社）のなかでこう記している。

「三池炭鉱を振り返れば、そこで働いている人々の



三池・宮浦鉱の慰靈碑

事情などお構いなしに、国の利益を優先して政府、経済界、学者が連携する構造があった。原発政策もまったく同じ根っこを持っている。国とエネルギーの歴史を見直さずにここまで来てしまっている。三池から、日本の『根っこ』を考えてほしい」

炭鉱の遺跡にとどまらず、大牟田、荒尾には強制的に連行された朝鮮人と中国人を追悼する碑が数多くある。過酷な労働・差別待遇のなかでの死に哀悼の意を示し、南北統一への想いを記している碑「不二之塔」。連行された中国人の殉難への哀悼と、平和と共に存共榮、国交回復と國際親善などへの想いを記した碑「中国人殉難者慰靈碑」（いずれも荒尾市の正法寺）。さらに大牟田市の甘木公園に「徵用犠牲者追悼碑」があり、荒尾市の小岱山の西峰の公園「不戦の森」には「三井三池炭鉱中国人殉難者慰靈塔」がある。

遊園地「三井グリーンランド」近くの成田山大勝寺には、三池争議を物語る「久保清君殉難乃碑」が保存されている。争議の際、久保清は1960年3月に四山坑前でスト破りの集団に殺され、当時32歳の若さだった。その志を受け継ごうという決意が込められ、「同志久保清に捧ぐ」と題して次のような詩が記されている。

「やがてくる日 歴史が正しく書かれる  
やがてくる日に 私たちは正しい道を進んだといわれよう  
私たちは美しく生きたといわれよう  
私たちの肩は労働でよじれ  
指は貧乏で節くれたっていたが  
そのまなざしは  
まっすぐで美しかったといわれよう  
まっすぐに  
美しい未来をゆるぎなく  
みつめていたといわれよう  
日本のはたらく者が怒りにもえ  
たくさんの血が 三池に流されたといわれよう」

何度も読んでも、胸にしみる詩だ。弱者を切り捨てる社会では、闘わずして負ければ、労働者には何も残らない。沈黙すれば、それはそれで弱者切り捨てがまかり通る。そんな危機感に常にさらされる労働者の魂の叫びがそこに込められている。

## 記憶と文化

日本の近現代史を濃密に圧縮している三池地域。過酷な労働、生活をめぐる争い、共生への夢…絶望と希望があやなす地域のなかで、人間への賛歌ともいえる文化的な遺産も生まれ、受け継がれているといえなくもない。

「どうしても美しい故郷よりも荒らされる故郷みたいなものの、荒らされる魂の方、すんでいく魂みたいな方に自分自身を重ね合わせる」<sup>5)</sup>

有明海の対岸、島原生まれ、大牟田で育った映画監督、森崎東(1927年生まれ)は大牟田についてそう語っている。『喜劇 女は度胸』(1969年)でデビューし、『生きてるうちが花なのよ死んだらそれまでよ党宣言』(1985年)で、「原発で働く“原発ジプシー”と、東南アジアから日本への出稼ぎ女性“じゃぱゆきさん”」という「現代日本の底によどむ問題」をあぶり出している。2013年に公開した「ペコロスの母に会いに行く」は、認知症の母を抱えた漫画家の介護体験を描き、キネマ旬報第1位に選ばれた。

「荒らされる故郷みたいなもの」にひかれる森崎監督は、厳しい現実社会で呻吟する人びとの魂に寄り添ってきた。社会の片隅で痛めつけられる人々が生き生きと抗う姿を描きだし、厳しい現実に対して負け続けることをやめてはいけない、と語りかけている。

少女漫画のイメージを変えたといわれる漫画家、萩原望都(1949年生まれ)は、県境に近い大牟田市立船津中学校の出身だ。「望都」は本名で、両親の思いが込められているという。漫画の常識を打ち破った革命的ギャグ漫画「マカロニほうれん荘」の作者、鴨川つばめ(1957年生まれ)は、その船津中学校の後輩だ。既成の知識、価値を超えて、自らが感じる面白さを強烈に表現している。このほか県境で少年期を過ごした劇団「京楽座」の中西和久(1952年生まれ)は中世に始まる「説教節」を語り、差別の問題を取り上げながら、一人芝居を続けている。まるで荒野の果てに新しき世界を求めているかのようだ。

人々の心の奥に秘められていた記憶。それを掘りおこし、耕していくこともまた文化ではないか。2017年度のノーベル文学賞を受賞したカズオ・イシグロを通して、そのことを改めて考えさせられた。

イシグロの作品の通奏低音は「記憶」をめぐる物語だ。現時点から過去を回想する形で、「違和感」や「むなしさ」といった人間の感情を細やかに描いている。あやふやな記憶や思い込み。それらをもとに会話が重ねられ、読み進めるうちに人間の弱さや、お互いの記憶のずれが浮かび上がる。イシグロは、5歳まで過ごした日本の生活をたどることで周りのイギリス人とは違った視点で、世界を見ることができたという。著書『忘れられた巨人』をめぐってこう語っている。

「21世紀は非常に多くの情報が行き交う時代ですが、気持ちを分かち合うためには、お互いに何を感じているのかを伝え合わなければいけません。例えば、多くの人が飢餓で亡くなったことに対し、その事実だけではなく、飢えるとはどういうことなのか、何を感じるのか。子どもが飢えて死んでいくさまを見ている親の痛み、苦しみはどのようなものか。そういうことを伝えたいのです」<sup>6)</sup>

時代や空間を超えて、「記憶」を通して伝えられる人間の感情。それは、普遍的で、変わることのないものではないか、とイシグロは語っていた。

私の物心がついたとき、見てきたのは「炭都」の街だった。「炭住コムニーン」から「去るも地獄、残るも地獄」といわれる極限の生活に追い込まれた人々。時代の荒波を浴び、濃密な人生の労苦を味わった人々はとてもしたかだった。人間を見る目はやさしく、温かで、鋭くもあった。世界各地から多くの人々が流れつづき、この地を去っていった。

そのあとに残された荒野にも、ギリギリまで失われていった日本人の魂のふるさとみたいものが立ち上がってくる気がする。荒尾駅前の「豊坑櫓」のモニュメントを見ていると、お盆のころ、にわか作りの櫓の周りを炭鉱マンたちが歌い踊っていた「豊坑節」がふと「記憶」の底から聞こえてくる。

『忘れられた巨人』は、三池炭鉱と置き換えて考えることもできる。イシグロの言葉でいえば、「記憶」をたどり、多様な視点から「炭都」としての三井三池を見つめなおすことで新しい世界が見えてくる。極限的な状況であれ、ごく普通に暮らしの中であれ、私たちの心を励まし、慰め、ゆさぶるのは、過去の鮮やかで細やかな「記憶」だ。未来に向けての追憶。その心の

作用こそが「心の文化遺産」をいえるものではないだろうか。三池の「坑道」は、私たちの「記憶」の闇から現在へとつながっている。

## 脚注

- 1) 三井財閥による朝鮮人連行  
<http://www.pacohama.sakura.ne.jp/kyosei/mituimike.html>
- 2) 「日本での強制労働から66年—尊厳を求める元米兵捕虜」  
レスター・テニー  
<http://jp.wsj.com/layout/set/article/content/view/full/299347>
- 3) 山根房光『みいけ炭鉱夫』
- 4) 若松沢清『三池移住五十年の歩み』
- 5) 「山田洋次というおのこ」森崎東とキネマ旬報編集者の対談から  
(世界の映画作家14 キネマ旬報社1972年1月。  
<http://www.asahi-net.or.jp/~hi2h-ikd/film/morisakidata/interview71yamada.html>から引用)
- 6) 『忘れられた巨人』(早川書房)発売記念の早川国際フォーラム  
「カズオ・イシグロ講演会」(2015年6月8日)